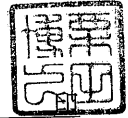


博士論文審査及び最終試験の結果



審査委員（主査） 栗田博之

学位申請者 原真由子

学位申請論文 「バリ語とインドネシア語のコード混在」

論文の概要

原真由子氏の博士学位請求論文「バリ語とインドネシア語のコード混在」は、1998年から2000年にかけて通算6ヶ月間、インドネシア・バリ州の州都デンパサールを中心に断続的に行われた現地調査において収集・記録された自然会話コーパスを一次資料として、バリ語とインドネシア語のコード混在現象を社会言語学的に分析した研究である。このバリ語とインドネシア語のコード混在現象、すなわち、会話テキスト内にバリ語要素とインドネシア語要素が混在する現象は、バリ語とインドネシア語が併用されるバリ言語社会を理解する上で重要な意味を持つ。このコード混在現象の中で本論文が特に注目するのが、一つの文の内部に生じるバリ語とインドネシア語の混在現象（文内コード混在）であり、そこには両言語の要素（語彙）と規則（文法規則と語彙選択規則）の両方が関与する。本論文の主な目的は、このバリ語とインドネシア語の文内コード混在がいかなる現象であるのかを言語構造的な概念と社会言語学的な概念を体系的に併用しながら明らかにする事にある。また、「コードスイッチング」という概念の理解に関して、バリ語とインドネシア語のコード混在という事例研究が持つ理論的な含意についても考察が行われている。

論文の内容

第1章では、バリにおけるバリ語とインドネシア語の2言語使用状況が話者のタイプ別、地域別、世代別、言語使用領域別に概観され、2言語が併用されるだけでなく、一定の言語単位内でバリ語とインドネシア語の要素が共起的に用いられる現象が頻繁に観察される事が報告される。そして、このような現象に対し、バリ語とインドネシア語は相互理解不能であるが、形態統語規則は極めて類似しており、基盤言語と挿入言語を区分する事が困難であるため、一般によく用いられる「コードスイッチング」という用語でなく、「コード混在」という用語を用いている。このコード混在現象を分析する上で、以下の三つの問題設定がなされる。

- (1) 統語構造においてコード混在はどのような規則性を示すか。
- (2) 談話構造においてコード混在はどのような機能を果たすか。
- (3) コード混在は、バリ語の敬語使用とどのような相互作用を起こしているか。

第2章では、コード混在テキストの階層的内部構造を表示しながら、言語学的妥当性を満たすドキュメンテーションを実現する記述枠組みを提案している。この枠組みを用いて、現地調査で収集した会話のテキストを記述し、コード混在の度合いを2言語の要素数に基づき計測する事によって、第3章以降で分析に用いる会話コーパスを確定している。

第3章では、バリ語母語話者の会話に見られる文内コード混在の一次資料を詳細に記述しながら、統語論的アプローチによるコード混在の分布を観察・分析し、文構成要素によってコード混在の比率が異なり、文構成要素間に見られるコード混在の出現の頻度は、主語、付加詞、述語の順に高くなる事、また、付加詞において主要部のみからなる副詞句および接続詞にコード交替が高い頻度で起き、それらの多くは談話マーカースとして機能する接続詞と文副詞であるという事が明らかにされている。そして、何故談話マーカースとして機能する接続詞と文副詞にコード交替が頻繁に起きるのかという問いに対し、談話構造的視点からの仮説「談話マーカースにおけるコード混在が、接続詞・接続詞的副詞である談話マーカースを際立たせる機能を（ちょうどプロソディック特徴が談話マーカースを際立たせるように）果たす」を提案している。また、観察対象の単位を文から語に移す事によって、語内部の形態論的コード混在と数詞・曜日にかかるコード交替の事例が頻繁に観察される事を明らかにし、形態論的・語彙的な条件がコード混在に働く場合があるという重要な事実が指摘されている。

第4章では、一般に「受身構文」と呼ばれる統語現象にかかわるコード混在現象が扱われている。既に述べたように、バリ語とインドネシア語は形態統語規則が極めて類似しており、基盤言語と挿入言語を区分する事が困難であるが、この受身構文では、2言語間で例外的に形態統語規則が明瞭に異なっており、基盤言語と挿入言語を区分して、「コードスイッチング」における「スイッチ」の方向を探る事が可能なのである。そして、受身構文を含むコード混在文を考察した結果、バリ語が基盤言語と解釈できる受身構文の頻度が、インドネシア語が基盤言語と解釈できる受身構文の頻度に比べて、圧倒的に高いという結果が得られた。このような受身構文におけるバリ語とインドネシア語の非対称性は、この論文が分析対象として設定した典型的なタイプのコード混在テキストにおける両言語の非対称性やバリ社会における言語勢力にかかわる両言語の非対称性に呼応していると指摘されている。

第5章では、統語規則にかかわるコード混在ではなく、バリ語の敬語法における語彙選択規則に関わるコード混在が扱われている。バリ語は語彙選択による敬語体系を有するが、インドネシア語はそれを欠いている。この2言語の語彙選択規則上の差異が一つの文に混在する現象を分析して、2言語のコード混在と敬語使用の相互作用を考察している。その結果、バリ語の敬語法における語彙選択規則に関して、「従来の規範」から「新しい規範」への変化の連続体の多様な段階が同定され、その段階の間を流動するメカニズムの解釈が提案されている。

最終章では、これまでの章で得られた知見を要約した後、残された課題について触れられており、この論文では対象から除外したタイプのコード混在テキスト（インドネシア語がバリ語にくらべて優勢である会話）についても予備調査を行っている事、またその結果が示唆する新事実（つまりコード混在が担う新しい語用論的機能）が報告されている。

論文の評価

本論文は、従来のインドネシアに関する社会言語学研究において体系的に取り扱われた事のなかったコード混在に関する一次資料を、現地調査によって組織的に収集し、その一次資料を言語学的な妥当性を持った枠組みによって記述し、分析する事に成功しているという点で、高く評価されるべきものである。また、単なる事例研究に留まる事なく、従来の研究で用いられてきた「コードスイッチング」という概念の理解に関して、バリ語とインドネシア語のコード混在という事例がどのような理論的な含意を持つかが考察されており、その面での理論的貢献も認められる。

本論文の方法論上の特色としては、コード混在テキストのドキュメンテーションのための記述の枠組みが独自に考案されている事が注目される。このようなコード混在の性質を明示し得る新しい表示法の導入は極めて独創的であり、コード混在現象の記述の枠組みとして広く用いられる事が期待される。この表示法で用いられる概念と表記はやや煩雑に感じられるが、正確なドキュメンテーションを目指すためにはやむを得ないであろう。

また、本論文全体を通じて、主要な考察対象であるバリ語とインドネシア語の文内コード混在現象をより広義の2言語混在現象、更には、バリ語とインドネシア語の2言語併用状況と関連付けながら論じようとする基本姿勢が貫かれており、その点で極めて正当な社会言語学的研究となっている。この点で、特に第5章の敬語体系に関する分析は高く評価されよう。

公開審査の概要

公開審査は2007年10月29日(月)に行われた。冒頭で原真由子氏による論文の概要説明がなされた後、審査委員との間での質疑応答に入った。以下がその概要である。

まず、本論文の学術的貢献に関しては、審査委員から次のような高い評価が寄せられた。

第一に、様々なレベルでのバリ語とインドネシア語の非対称性に平行関係が観察できるという事実は、バリ言語社会を理解する上で重要な発見であると言える。第二に、特定の言語現象において、他とは異なる振舞いをする統語構造を取り上げ、そこに認められるパターンを観察し、考察を進めるというアプローチは、言語構造を分析する際に極めて有効な方法ある。このような言語学的アプローチを社会言語学的な現象であるコード混在に適用して成功を収めている点は、高く評価すべきである。第三に、第5章で考察された敬語体系に関するコード混在現象は、コード混在/交替に関する一般的な研究の脈絡から見て、極めて新しい領域だと言える。従来の研究では、もっぱら文法的なコード交替現象が取り扱われていたのに対して、第5章では語彙選択規則に関わるコード混在が考察の対象となっている。その意味で、この章では極めて独創的な視点から分析が進められており、この章で最終的に得られた知見は、社会階層の変化と言語変化との相互干渉における語用論的なストラテジーの議論に関わって来るような、大きな理論的な広がりを持つものと言える。

以上のような評価はすべての審査委員に共通するものであったが、幾つかの問題点も指摘された。

第一に、本論文で扱われているコード混在会話テキストは、原氏が「典型的」なタイプのテキストと呼ぶ、バリ語要素がインドネシア語要素よりも優勢なコード混在テキストである。これに対し、原氏が「非典型的」と判断したタイプのテキスト、すなわち、インドネシア語要素がバリ語要素よりも優勢なコード混在テキストは分析の対象からはずされ、今後の研究に委ねられている。「典型的／非典型的」という原氏の判断は妥当であろうが、「非典型的」なタイプのテキストの分析結果が本論文で得られた知見とどの程度整合性を持つのか、予備調査の結果についてももう少し詳しい説明があつてしかるべきであろう。第二に、コード混在現象において、バリ語とインドネシア語の要素（語彙）と規則（文法規則と語彙選択規則）の両方が関与しているが、規則に関してはコード交替が必要になるのに対し、要素に関しては、敬語、親族名称、色彩語彙等を除き、ほとんどの語彙に関して選択規則が存在しないために、コード交替現象自体が生起せず、借用といった形で、語彙が混在する現象が一般に広く観察される。この両者の区分が曖昧なまま、コード混在としてひとまとめに扱われてしまっているために、議論の焦点が多少曖昧になってしまっている。また、細かな点として、「受身」という用語がインドネシア語学の伝統に基づいて本論文では用いられているが、「focus」「topicalization」といった概念で説明する方が適当であろう。また、敬語法に関しては、「貴族層／平民層」といった社会階層を軸に分析が進められているが、社会関係を考える上でその他の変数（親族関係、仕事上の関係等）も考慮に入れるべきであるし、会話が行われる社会的文脈に関しても注意すべきである。

以上のような指摘に対し、原真由子氏からは明晰な応答がなされ、これらのコメントを踏まえた上で更に研究を深化させて行きたい旨の発言があつた。実際、これらの指摘は本論文の内容をより精緻なものにするための前向きなコメントであり、本論文の価値が低下するものではないという点で、すべての審査委員の意見は一致した。

論文審査及び最終試験の結果

本論文は現地調査によって収集・記録された自然会話コーパスを一次資料として、バリ語とインドネシア語のコード混在現象を社会言語学的に分析した独創的な研究であり、従来の「コードスイッチング」現象の研究に対して理論的な貢献も認められる。組織的に収集された一次資料の分析が厳密な方法論に基づいて手堅く行われており、将来的な発展も十分に期待出来るとの観点から総合的に判断して、審査委員会は全員一致で、本論文が博士（学術）の学位を授与するに値するものであるとの結論に達した。